Osaka University Knowledge Archive

Title	『後水尾院和漢千句』における固有名詞の特徴について ： 和漢聯句と和漢俳諧との比較
Author(s)	山田, 理恵
Citation	語文. 2004, 83, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69042
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『後水尾院和漢千句』における固有名詞の特徴について

――和漢聯句と和漢俳諧との比較――

山田理恵

はじめに

寛永十三（一六三六）年五月十三日から十五日までの三日間、後水尾院は、仙洞において和漢聯句の千句を興行した。この千句は、現在『寛永十三年八月十五日於仙洞御会漢和聯句』（『国書総目録』の記載による。以下、『後水尾院和漢千句』あるいは「本千句」の呼称で示す）として伝わっている。

『後水尾院和漢千句』興行の意義については、田中隆裕氏により、正親町、後陽成、後水尾の三代にわたる帝によって興行された和漢千句であること、儲君（後の後光明帝）の四歳の祝言を込めることの二点が指摘されており、[1] また、後水尾院が通常の和漢聯句の御会とは別に、和漢千句興行のための訓練を前年の寛永十二年九月から始めていることを、千句の連衆の一人である鳳林承章の日録『隔蓂記』[2] から指摘されている。

田中氏が指摘されるように、禁裏・仙洞での和漢聯句千句の興行は、二代前の正親町帝による天正十九（一五九一）年四月二十一日から二十三日にかけての千句興行（『連歌合集』二十七）、前代の後陽成帝による文禄二（一五九三）年四月二十日から二十二日にかけての千句（曼珠院蔵）と慶長九（一六〇四）年九月三日から五日にかけての千句（京都大学付属図書館谷村文庫蔵）の三回の興行に続くものであり、加えて、表八句のみの追加を除き、一日三百乃至四百韻を巻き、和句にも押韻を課す漢和は一日一百韻にとどめるなど、その興行の形態も正親町、後陽成両天皇の和漢千句に倣ったと考えられる。また、寛永十二年九月の臣下を交えた和漢千句の訓練を始める二ヶ月前の七月に院自身が『御独吟和漢聯句百韻』（発句「荻の葉に山口しるし秋のこゑ」京都大学附属図書館蔵平松家本他）を巻いていることも、本千句成立の準備の一つと考えられよう。[3]

このように『後水尾院和漢千句』は、後水尾院の和漢聯句への興味と自信を深めた結果ゆえに成立した和漢千句であり、その興

行の意義や入念に準備された千句であることは田中氏が指摘している通りである。しかし、このような後水尾院の立場から見た和漢千句興行の意義についての考察がある一方、千句の内容についての詳細な研究は十分になされているとは言えない。『後水尾院和漢千句』を、後水尾院を中心とした堂上連歌壇の粋を集めた作品として、詳細に検討する必要があるといえよう。

一、和漢聯句と典拠漢籍

和漢聯句は、漢句と和句を連ねる文芸である。同じく漢句と和句を用いる文芸に和漢俳諧が存するが、両者の大きく異なる点は、和漢聯句では、漢句に漢籍を典拠として用いることが不可欠である点にある。一方の和句には「付合の方法における発想の方法が、伝統的連歌よりも禅林聯句やその関連文芸に近くなることがあったと考えられる。但し、それでいて和句一句としての表現においては、連歌的世界を踏み越えてはならないのである」[4]と深沢真二氏が述べられるように、連歌の伝統を受け継いだ詠まれ方をするものであった。和漢聯句の特徴は、漢句の内包する漢的世界に発揮されていると考えるため、本稿では和漢聯句の和句に関する考察を最小限に留め、漢句の典拠を明らかにすることを主眼とし、その特徴を更に明瞭にするために和漢俳諧の漢句に詠み込まれている素材との比較を試みたい。

和漢聯句と和漢俳諧との比較に関しては、深沢眞二氏により、押韻に用いられる韻字による和漢聯句と和漢俳諧の比較が韻書を手がかりとしてなされており、後者の和句と漢句との違いについても考察があるが[5]、漢句の内容、詠まれた漢籍典拠などについては検討がなされていない。

『後水尾院和漢千句』の漢句作者七人のうち、昕叔顕晫、鳳林承章、九岩中達、俊甫光勝、雪岑梵崟の五人は博覧強記を競う五山僧であり、土御門泰重は、公家（陰陽家）である。泰重については、田中氏によって

泰重は後陽成が元和元年に度々興行した点取四吟聯句の連衆で、漢句を得意とした可成の自信家でもある。後水尾も彼と点取両吟漢和等を元和四～六年に数回試み、（中略）彼は勉学の御相手なのであろう。[6]

と指摘されており、後水尾院が漢詩文等に遊ぶ時の兄的存在と言ってよい。共に勉学を重ねてきた仲間であり、漢籍に精通した泰重の和漢千句への参加は、後水尾院にとって心強いものであったと思われる。一方、和句の連衆である近衛信尋、阿野實顕、滋野井季吉、勧修寺経広、園基音、高倉嗣良、岩倉具起の七人は、後水尾院や泰重、五山僧ほどには漢籍に精通していなかったと思われるが、先行する漢句の意味を理解し、咀嚼して和句を付けていく必要があった。漢句の内容・用いられた典拠漢籍を理解するためには、詠み込まれた固有名詞がそのきっかけの一つとなったと考える。

そこで、まず『後水尾院和漢千句』に詠み込まれた固有名詞に着目し、整理してその特徴を示す。そしてその特徴について検討

するために、漢句と和句に用いられる固有名詞を比較して、両者の違いを明らかにしたい。こうした作業によって、和漢聯句の持つ、文芸的特徴が見いだされるのではないかと考える。

次いで、和漢聯句と和漢俳諧の素材の比較として、そこに用いられる固有名詞の特徴と、和漢俳諧に用いられるそれとの比較を試み、和漢聯句の具体的特徴について更なる考察を加えたい。

二、『後水尾院和漢千句』の漢句に詠まれた固有名詞の根拠

『後水尾院和漢千句』に詠み込まれた固有名詞を漢句・和句別に一覧表にすると、稿末の【表一】のようになる。

一見して明らかなように、和句と漢句では詠み込まれる固有名詞に顕著な違いがみられる。人名と地名に注目していくつか取り上げてみたい。

漢句に人名（太真夫人）と地名（馬嵬坡）を詠み込んだ例として、084句がある。

083 そねみおふうき身のすくせなげかれて　　前関白

084 棄土馬嵬真（棄てゝ土　馬嵬の真）　　梵崟

084句は、白居易「長恨歌」（『古文真宝前集』巻八）の「馬嵬坡下泥土中、不見玉顔空死処」（馬嵬坡下　泥土の中、玉顔を見ず空しく死せし処）と、「樓閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子。中有一人字太真、雪膚花貌参差是」（樓閣　玲瓏として　五雲起ち、其の中　綽約として　仙子多し。中に一人有り　字は太真、雪膚花貌　参差として是なり）を典拠とする句である。「真」という人名と「馬嵬」という地名を詠み込み、前の和句の漠然とした恋を玄宗皇帝と楊貴妃の恋に転じている。二句の意味は、「人々に嫉妬されるという運命をなげくこの憂身であることよと、太真夫人は、馬嵬坡で棄てられ土となった」となる。

この例のように、漢句で固有名詞を用いることで、前後の和句の世界を具体化し、限定するという趣向が、和漢聯句の特徴の一つであり面白さであったと思われる。

同じ様に、漢句に人名（菅原道真）と地名（径山）を詠み込んだ例に013句がある。

012 手折てかへる梅の一枝　　高倉三位

013 温問菅参径（温問　菅　径に参す）　　九岩

013句は、中世に流布した渡唐天神説話[7]をふまえた句であり、具体的な典拠は『菅神入宋授衣記』の「某夢。天神袖挿梅花。肘懸小袋曰。我参無準受衣云々」（某夢む。天神　袖に梅花を挿し、肘に小袋を懸けて曰く、我　無準に参じ衣を受く云々、と）があてはまるか。二句の意味は、「渡唐天神（菅原道真）は、渡宋して径山の無準師範に参禅して教えを請い、一枝の梅を手折って帰った」となる。

上記のような、人名と地名を同時に詠み込み、極めて限定した世界を形作る例は、千句全体でもさすがにこの二例のみであるが、漢字一文字で人名を詠み込む例は多く見られる[8]。

027 氷とくる波にたかべやうかぶらん　　高倉

028 縦如范掣身（如ことを縦にして　范　身を掣く）　　九岩

028句は、『蒙求』に見られる「范蠡泛湖」の故事（『史記』越世家、同・貨殖列伝、『漢書』范蠡伝等）の「…乃装其軽宝珠玉、與其私徒属乗舟浮海以行、終不反」（乃ち其の軽宝珠玉を装ひ、其の私の徒属と舟に乗り海に浮びて以て行き、終に反らず）を典拠としており、范蠡を「范」の漢字一文字で詠み込む。二句の意味は、「氷の解けた（春になった五湖の）波には小ガモが浮んでいる、そこへ范蠡は（越王の許から）身を引いて船出した」となる。

漢句に詠まれる固有名詞の多くは人名であるが、このように、漢字一文字で、周知の孔子・荘子や、『史記』・『漢書』などの史書や童蒙書である『蒙求』によって知られる人物（范蠡など）、詩人では、その人となりが詩とともによく知られ、愛好された人物（陶淵明、杜甫など）、また詩話によって詩人のエピソードが知られていた人物（賈島など）を読み込むことは、文字数の制限された漢句の中で、漢籍の世界を具現化するための方法として、漢故事の中の人物が利用されているためであると考えられる。

漢句とは対照的に、和句では人名を詠み込んだ例は千句中に967句（飛鳥井君）の一例のみである。

966 かはる渕瀬はたゞ涙川　　高倉

967 飛鳥井のちぎりはかなくたえはてゝ　　前関白

967句は、966句の涙川からの連想で導き出された『狭衣物語』の登場人物、飛鳥井君を詠んだ恋の句である。二句の意味は、「移りやすいことである、淵や瀬は私の涙で涙川となってしまった、（狭衣の）飛鳥井君の契が、はかなくも絶え果ててしまった悲しみによって」となる。

和句に詠み込まれる固有名詞は、右の「飛鳥井君」、583句の「北野天神」（神名）を除くと、地名[9]に限られる。これは、和歌・連歌における歌枕の伝統を継承するものであると思われ、一方の漢句が、「馬嵬坡」と「径山」のように、人名の補足として地名が詠まれることはあっても、地名のみが一句に詠み込まれることはないという特徴とは対照的である。

本千句では、和句は連歌の枠を出ずに本朝の素材を詠み、漢句では漢籍から取材した素材を詠み込むという、それぞれの承継する文芸の伝統を逸脱しないというルールが決められている中で句を連ねているのである。

三、和漢聯句と和漢俳諧の典拠

和漢聯句と同じく和句と漢句を連ねるという形式をもつ和漢俳諧という文芸がある。連歌と俳諧の違いについて「和歌優美に対する卑俗滑稽、正統に対する異端・新奇なものとして、俳諧は大きく連歌からはみ出したのである」[10]といわれるように、和漢聯句に対する和漢俳諧も、形式は同じながら後者は前者からは逸脱したものであると理解してよい[11]。

前節まで和漢聯句において固有名詞を取り上げたように、和漢俳諧の固有名詞についても同様に、どのように用いられる傾向があるのかを考察する。

比較対照として扱うのは、北村季吟編『誹諧両吟集』（寛文四年刊、天理図書館綿屋文庫蔵）[12]下巻所収の和漢漢和両吟百韻各二巻（追加の和漢二句を含む）漢和歌仙両吟一巻の計四三八韻である。『後水尾院和漢千句』の興行とほぼ同時期、松永貞徳率いる貞門俳諧において和漢俳諧が盛行し、季吟・立圃らが特に和漢俳諧を好んだことについては尾形仂、深沢眞二両氏の論考に詳しい。[13]

貞門の俳人たちと和漢俳諧を巻いた漢句作者の多くは五山僧であり、『後水尾院和漢千句』の連衆である鳳林承章は、野々口立圃と両吟漢和俳諧百韻を巻いており、その百韻は寛文十二年刊の『俳諧塵塚』に収録されている。和漢聯句と和漢俳諧の漢句は共に五山僧によって作られている。

『俳諧両吟集』と、『後水尾院和漢千句』との比較が容易になるよう整理したものが、稿末の【表二】である。

この表で明らかなように、和漢俳諧に用いられる固有名詞は、漢句・和句に大差はなく、主として両句共に本朝の素材が詠み込まれているという点に特徴がある。和漢聯句では、概ね和句にのみ本朝の地名が詠み込まれており、漢句にわずかに唐土の地名が用いられていたこととは対照的に、和漢俳諧では、漢句・和句のいずれにも唐土の地名は用いられず、本朝の地名のみが用いられている。和漢俳諧は、漢句（五言）という唐土の形式を残しながらも、素材の上では、紛れもない本朝の文芸として成立していたことが見て取れる。

和漢聯句の漢句で多く唐土の詩人が詠まれたこととは対照的に、和漢俳諧では唐土の詩人はわずか「白楽（天）」一例しかみえず、しかもそれは季吟・周令両吟和漢漢和四百韻の追加に、

401　吟じかはす蟬やからうた和歌　　季吟
402　白楽汗顔行（白楽　顔に汗して行（にげはし）る）周令

とあるように、「外では蟬が鳴いている、我々は漢詩と和歌を吟じかわしたところ、あの唐の白居易が顔に汗をかいて逃げ出すくらいよいものが出来た」という、四百韻成就の矜持を示すために、あえて白楽天を引き合いに出したものであり、各百韻を巻く際に素材として唐土を意識して用いたとは言い難い。

また、和漢聯句には見られない和漢俳諧の漢句の特徴として、漢籍ではなく本朝の文学から取材した人名が多く用いられていることがあげられよう。[14]次に「発句をも」の巻の284句と290、291句の例をあげる。

283　むざんやなのがれかたのゝ鷹の鳥　　季吟
284　熊谷敦盛讐（熊谷は　敦盛の讐）　　周令

284句の熊谷・敦盛は『平家物語』巻九「敦盛最後」の、熊谷が笛の名手である十七才の敦盛を討ち取ってから出家の志を固めた話を詠んだものであり、前句の「むざんやな」から御伽草子「小敦盛」[15]を連想したことによる付合であろう。二句の意味は、「無惨であることよ、交野の鷹狩りからにげてきた鳥は。その無惨な鳥のように敦盛を討った熊谷は、かたきである」となる。

290　被迁鬼海嶌（迁さるるは鬼海が嶌）　　周令

291　俊寛乙盃得（俊寛乙（ゆるす）こと盃（なん）ぞ得ざらん）　々

291句の「俊寛」は同じく『平家物語』巻三「赦文」「足摺」の鬼海ヶ島に一人置き去りにされた俊寛僧都を詠み込んだものである。二句の意味は、「鬼海ヶ島に遷されたことを、あの俊寛はどうしてゆるすことができようか」となる。

また、和漢聯句の漢句では童蒙書『蒙求』にも見られる、史書からの人名が多く詠み込まれているが、和漢俳諧では次の「発句をも」の巻の294、295句のように、本朝の俚諺を漢句に置き換えた例が見られる。

293　下戸なれどしゆにまじわれば酔はすらし　季吟

294　勧雀囀蒙求（勧の雀は蒙求を囀る）　周令

295　読不習経萬（習はぬ経を読む萬（ハチ））　同

294句で『蒙求』[16]という漢籍自体を用いて、「勧学院の雀は『蒙求』を囀る」という本朝の世話・俚諺を漢句にそのまま置き換えるという詠み方をしているのである。293句、294句の二句の意味は、「下戸であっても、しゅ（酒・朱）に交われば酔ってしまうらしい、勧学院の雀は『蒙求』を囀る」となる。293句、294句は、和句から漢句への付句でありながら、本朝の俚諺という同一の素材を用いて対句のように詠まれており、俳諧ゆえの遊び心であろう。

また、295句は、同じく本朝の俚諺「寺のほとりの童はならはぬ経をよむ」[17]をもじって漢句にしたものである。[18]294、295句の二句の意味は、「勧学院の雀は『蒙求』を囀り、習わぬ経を読むのは、門前の小僧ではなく、蜂である」[19]となる。「スズメバチ」を念頭においた、雀から蜂への連想による付句である。

このような和漢聯句と和漢俳諧の固有名詞の用いられ方の違いを整理すると、次のようになる。

一、和漢聯句の漢句では、唐土の人名、漢籍名、人名の補足として唐土の地名が主に詠まれる。

二、和漢俳諧の漢句では、本朝の地名、本朝の人名、仏名が主に詠まれる。

三、和漢聯句の和句では、本朝の地名、神名が主に詠まれる。

四、和漢俳諧の和句では、本朝の地名、本朝の人名が主に詠まれる。

和漢俳諧の漢句（二）と、和漢聯句の和句（三）の特徴は大変似通っているといってよい。和漢俳諧の漢句では、本朝の固有名詞を用いようとする傾向があり、それは唐土の固有名詞を用いる和漢聯句の漢句から離れようとする試みであると考えられる。

四、和漢俳諧における固有名詞以外の素材

和漢聯句と和漢俳諧を比較して、固有名詞以外の本朝の素材に目を転じてみたい。和漢俳諧には、本朝の素材を、和句のみでなく漢句にも用いるという傾向が見られる。

次の「洛花今織錦」巻に詠まれた429、430句の例では、

429　月やあらぬ春とはかはる後の彼岸　季吟

430　我身一電光（我が身一つは　電光）　山石

429句の「月やあらぬ」から『伊勢物語』（第四段「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ　わがみひとつはもとの身にして」[20]）を連想し、430句で「我が身一つは」と受けて、「電光のように儚いものである」と元南禅寺僧である山石[21]にふさわしく、『金剛般若経』の偈「一切有為法、如二夢幻泡影一、如レ露亦如レ電、応レ作二如是観一。」に見られるような釈教的無常感を一句のうちに詠み込んだものである。二句の意味は、「月は同じであっても、春の彼岸と秋の彼岸では変ってしまったが、私自身はそれ以上に電光のようにあっという間に変化してしまった」となる。

このような、和漢俳諧に見られる（固有名詞を含む）本朝の素材の用いられ方を、和漢聯句のそれと比較して整理すると、次のようになる。

一、和漢聯句の漢句では、漢籍から取材した典拠詩文を詠み込む。

二、和漢俳諧の漢句では、本朝の素材を詠み込む。

三、和漢聯句の和句では、本朝の素材を詠み込む。

四、和漢俳諧の和句では、（俳諧連歌と同じく）漢語が詠まれる。

つまり、固有名詞のみならず、本朝の素材である、和歌や本朝の文学、俚諺をもじって漢句に用いることは、和漢聯句には決して見られない和漢俳諧の特徴であると言えよう。

これまで見てきたように、和漢俳諧では俚諺や和歌などの本朝の文学の素材を漢句に詠み込むことが「俳諧」であると意識されていたことが、固有名詞以外の素材の用いられ方からも伺える。つまり、和漢俳諧は「和」と「漢」の境界線を、積極的に曖昧にした文芸であるといえよう。一方の和漢聯句の、漢句が漢籍から取材した詩文を典拠として用い、和句が本朝の素材を用いるという原則を固守しようとする姿勢とは対照的である。

和漢聯句は、「和」と「漢」の境界線を侵さないことを固守した文芸であり、「和」と「漢」が対立しながら一つの文芸として成立したものであることが、和漢俳諧との比較によってより一層明らかである。

まとめ

まず、和漢聯句である『後水尾院和漢千句』の特徴の一点目として、人名、書名は漢句にのみ用いられるものであり、逆に和句では、地名以外の固有名詞はほとんど用いられないということがあげられる。ここには、和漢聯句という文芸の持つ、和句は本朝の連歌の枠をはみ出さず、漢句は漢籍から取材した素材を用いるという、それぞれが対立しながら一つの文芸として融合している特徴が見て取れるのである。二点目の特徴としては、和句には多用される地名であるが、漢句にはごく少数しか詠まれず、人名の補足として用いられているにすぎないことがあげられる。これは、漢句が一文字で人名・地名を表現しようとすることに対し、和句では地名（歌枕）の持つ「土地の実景の概念化、古歌や類歌に

よって形成された土地に対する印象や通念、土地の名辞の形からの連想、事物の空間的な把握（涙川など）などから生み出された、類型的な美意識と表現機能[22]」を短い句形に利用しようとしたことによるものであろう。

深沢眞二氏は「寛永期の和漢俳諧」において、韻字における和漢聯句と和漢俳諧の比較をされており、和漢聯句の和句と漢句について「和句と漢句は互いに、相手方の伝統に属する表現をとることが稀である。（中略）あまり多くではないが、寛永期の普通の漢和聯句のほかの百韻について調べてみても、概してこのような和と漢の伝統的表現の対立が見られた[23]」と述べる。本論文における和漢聯句によまれる素材（固有名詞）の調査でも、和句と漢句がそれぞれの伝統を継承した固有名詞を詠むことを固守していることが明らかである。

また、和漢俳諧について深沢氏は、「和句は連歌の、漢句は漢詩文の伝統的表現から逃れ出て、伝統の対立という和漢聯句の意味合いは見る影もなくなっている。俗言という共通の素材が充実し、漢句に連歌的な句も見られ、和句漢句の内容は殆ど同化していると言える[24]」とされている。

本論文における和漢聯句と和漢俳諧によまれる素材（固有名詞）の調査では、俗言を用いるというよりは、和文学の素材（特に人名・地名）を漢文学が全面的に取り入れることによって和句漢句の内容が同化する様が見て取れるのである。和漢俳諧が本朝の素材を用いて和臭を強めていくことで、和漢聯句とは異なる「俳諧」としての独自性を確立したことが指摘できよう。和漢俳諧は、「唐ごころ」ではなく五言の「漢句という形式」を用いた紛れもない本朝の文芸として存在している。

和漢聯句が、和句と漢句と連ねていくという形態の文芸である以上、連衆は漢句作者のみならず和句作者もその漢籍典拠を理解していたはずであり、本論文において『後水尾院和漢千句』の固有名詞に注目することで、当時の必須の漢籍に関する教養、共通の漢籍の知識の一端が窺えたと考える。それは、後水尾院を中心とした堂上連歌壇の共通の漢籍知識であると同時に、彼らと和漢俳諧の座を共有した貞門の俳人を始めとする、近世初期の知識人達の詩嚢をも明らかにするものと言えよう。

注

（1）「後水尾院の連歌活動について―江戸初期宮廷連歌の動向―」『連歌研究の展開』金子金治郎編、勉誠社、一九八五年八月）

（2）『隔蓂記』によると、後水尾院仙洞での和漢聯句御会は、寛永十二年九月に二百韻、十一月に三百韻、十二月には四百韻と漸次数を増やしている。十一月の和漢二百・漢和百韻は和漢千句初日と最終日のそれぞれ一日三百韻興行に備えたものであり、十二月の和漢三百・漢和百韻は和漢千句二日目の一日四百韻に備えた稽古であったと考えられる。（赤松俊秀編『隔蓂記』第一巻、鹿苑寺、一九五八年十一月）

（3）『連歌総目録』（明治書院、一九九七年四月）による。

（4）深沢眞二氏は、「和漢聯句の俳諧的側面―『百物語』所引句をめぐって―」（『連歌俳諧研究』七九号、一九九〇年三月）に「聯

句ならびに和漢聯句の漢句の作法は、詞は旧く故事来歴のあるものを尊び、作意は新しく古人の句に拠らないことを宜しとする。」と述べる。

(5) 深沢眞二「寛永期の和漢俳諧」(『連歌俳諧研究』七〇号、一九八六年一月)

(6) 前掲論文(1)

(7) 当時の「漢」的世界を象徴する仏鑑禅師無準師範のもとに「和」の学芸的世界を象徴する北野天神菅原道真が一夜参問したとする和漢融合の新思想で、禅僧の間に流行した。(『国史大辞典』第十巻より、吉川弘文館、一九八九年九月)

(8) 漢句に詠まれた人名は5.8%(五〇〇句の内の二九例)その内人名を一字で表わすのは、元来一字で表わされる堯・舜を除いて、96%(二五例の内の二四例)である。

(9) 和句に詠まれたその他の地名は以下の通りである。
すま(須磨)、嵯峨、小野、大井2(大井川1、大井の里1)、小倉(小倉の山1、小倉の里1)、吉野川2、あすかの川(飛鳥川)、葛城、ふじのたけ(富士山)、清瀧川、初瀬、宇治の山、鷲の高嶺(霊鷲山)、かた野のみの(交野御野)、難波3(難波わたり2、難波がた1)、逢坂の関、金のみたけ(金峰山)、なかばし(中橋)、大原の里、小塩2(小塩1、小塩山1)、生駒山、住吉、こや(昆陽)、三輪の山、豊等(豊浦)、大江殿、くらぶの山(暗部山)、明石がた

(10) 宮脇真彦氏執筆『日本古典文学大事典』九八一頁「俳諧」の項(明治書院、一九九八年六月)

(11) 深沢眞二氏によって、押韻に用いられる韻字を手がかりにした和漢聯句と和漢俳諧の比較が夙になされていることは先に述べた(前掲論文〈5〉)。

(12) 榎坂浩尚氏執筆「誹諧両吟集」の稿(『俳文学大辞典』角川書店、一九九五年十月)によると、『俳諧両吟集』は、『後水尾院和漢千句』成立よりやや時代は下るが、伝本も多く、詠み方の手本として利用された形跡があるといわれている。

(13) 尾形氏「和漢俳諧史考—句付成立素因に関する一考察—」(『連歌俳諧研究』二号、一九五二年二月、後同氏『俳諧史論考』所収、桜楓社、一九七七年十一月)、深沢氏前掲論文(5)

(14) 1.8%(四三六句(四百韻の追加二句を除く)の内、八例)

(15) 『小敦盛』「あらむざんやな、生れてよりしてこの道は、さなきだになごり惜しきならひぞ」本文は日本古典文学大系『御伽草子』、岩波書店刊)による。

(16) 正保二年(一六四五)年成立、松江重頼編『毛吹草』巻二ノ42ウ「世話付古語」項、(加藤定彦編、初印本『毛吹草』ゆまに書房、一九七八年五月)

(17) 同じく『毛吹草』巻二ノ42ウ「世話付古語」項

(18) また、294句から295句への連想には、幸若「富樫」の「勧学院のすゞめは蒙求をさえづる。智者の辺のわらんべは。ならはぬ経をよむとは。ようこそこれはつたえたれ」(大頭左兵衛本)の影響も考慮に入れられよう。

(19) 蜂は、「貶」、または「虫偏に萬」とも書かれるため、「萬」のみで「ハチ」と読ませたものであろう。

(20) 『古今和歌集』巻十五、恋747、在原業平朝臣

(21) 『俳諧両吟集』下「洛花今織錦」の巻の詞書に「元南禅寺に有けるを、肥後の八代に年経て後…」とある。

(22) 小町谷照彦氏執筆『日本古典文学大事典』一〇三頁「歌枕」の項(明治書院、一九九八年六月)

(23) 前掲論文(5)

(24) 前掲論文(5)

【表一】固有名詞一覧表

			※1	漢句	※1	和句
人名	詩人		658・482	陶淵明2		
			451・551	杜甫2		
			393	杜牧1		
			527	賈島1		
			051	元稹1		
			051	白居易1		
			541	韓愈1		
	史書		370・835	堯2		
			532・835	舜2		
			052	彭越1		
			052	韓信1		
			084	太真夫人1		
		(蒙求)	156	屈原1		
		(蒙求)	156	子蘭1		
		(蒙求)	452	劉伶1		
		(蒙求)	394	龔遂1		
		(蒙求)	028	范蠡1		
		(蒙求)	295	司馬相如1		
		(蒙求)	311	許由1		
	論語・荘子		684・972	孔子2		
			684	周公1		
			481	荘子1		
	神祇・釈教		013	菅原道真	583	菅原道真
				(渡唐天神) 1 ※2		(北野天神) 1※2
			298	恵日1		
	その他				967	飛鳥井君1 ※2
書名			481	大蔵経1		
			389	臨済録1		
			971	荘子1		
			147	冷斎夜話1		
地名			013	径山1		筑紫1、涙川1 他全36例
			084	馬嵬坡1		※3

※1 半角数字は千句の通し番号

※2 網掛けは本朝の固有名詞

※3 → (九)

【表二】『俳諧両吟集』下巻・固有名詞一覧表

		※	漢句	※	和句
人名	詩人・歌人	402	白楽（天）1	317	人麿1
	（謡曲狂言）	221	花子1		
	（平家物語）	284	熊谷1		
	（平家物語）	284	敦盛1		
	（平家物語）	291	俊寛1		
	（源氏物語）	392	光源氏1	275	おきなまろ1
	（狭衣物語）	393	狭衣1		
	（御曹子島渡）	415	牛若1		
	（曾我物語）	416	鬼王1		
神名		258	三輪神1	022	佐保姫1
釈教		042	時宗1	345	浄瑠璃世界1
		151	愛染（明王）1		
		184	阿羅漢1		
		222	薬師（如来）1		
その他		025	延喜1	111	伊勢暦1
		025	神泉（苑）1	155	奈良茶1
		200	南殿1		
		294	勧（学院）1		
書名		294	蒙求1		
地名		083	中山1	092	志賀の唐崎1
		170	湯山1	099	よし野川1
		175	那須野1	110	やま田のはら1
		185	筑紫1	117	小塩山1
		186	薩摩1	118	おほはら1
		231	豊（州）1	134・424	宇治2
		282	河内1	154	飛火野1
		289	男山1	163	むさし野1
		290	鬼海島1	176	下野1
		324	富士1	241	つくし1
		333	八坂1	250	藤の川1
		334	祇園1	257	有馬山1
		341	自凝嶽（おのころじま）1	268	あふ坂1
		342	鳴渡1	283	かたの1
		374	日本1	316	あかし1
				346	ひえのやま1
				351	つくばね1
				410	紫野1

※半角数字は下巻所収句の通し番号
※網掛けは唐土の固有名詞